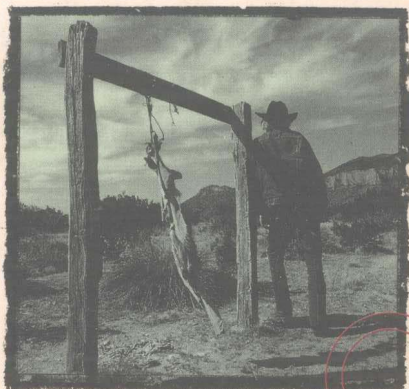


B O R D E R
M U S I C

R O B E R T
J A M E S
W A L L E R

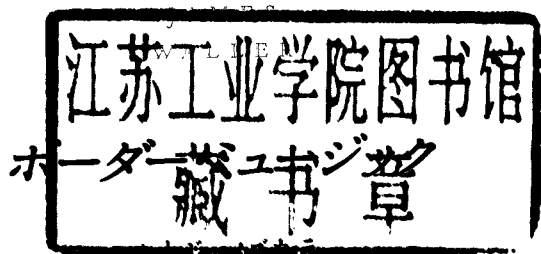
ボーダー・ミュージック

ロバート・ジェームズ・ウォラー
村松 潔 訳



B O R D E R
M U S I C

R O B E R T



村松 潔 訳

BORDER MUSIC

BY ROBERT JAMES WALLER

COPYRIGHT © 1993, 1994, 1995 BY ROBERT JAMES WALLER

JAPANESE TRANSLATION RIGHTS RESERVED BY BUNGEISHUNJU LTD.

BY ARRANGEMENT WITH AARON M. PRIEST LITERARY AGENCY, NEW YORK

THROUGH TUTTLE-MORI AGENCY, INC., TOKYO

PRINTED IN JAPAN

ボーダー・ミュージック

一九九七年八月一日第一刷

著者 ロバート・ジェームズ・ウォラー

訳者 村松潔

発行者 新井信

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三

電話〇三—三二六五—一一一一

印刷所 凸版印刷

製本所 加藤製本

万一、落丁乱丁があれば送料当社負担でお取替え
いたします。小社営業部宛お送りください。
定価はカバーに表示してあります。

ISBN4—16—317090—1

はるかな列車の音に
駅に残された乗客たちに

おれたちは馴染みの曲をうたうだろう、
夏の娘たちのために。

おれたちは安葉巻をふかして、
古着をまとうだろう。

おれたちはもう一度それをやるだろう、
月が一巡りして、

ウエスト・テキサスの路上で

おれたちといっしょにまわりだす前に。

△テキサス・ジャックのための最後のワルツ△

『アフター・サパー・ソングズ』から

ボビー・マクレガー

ボーダー・ミュージック

装幀
坂田政則

第一章

一九八六年、ミネソタ北部――

なんと自由だったことか

そのどこかの下種野郎は、本来ならドル札を挟むべきところを、そうはせずにリンダ・ロボのGストリングを筆^ひりとった。それを見ると、テキサス・ジャック・カーマインは思わずつとなつて、ビリヤードのキューでその男を殴り倒した。四時間後、そこから三百キロほど離れたチザムという町で、ジャックはリンダにコーヒート・スイート・ロールをおごった。それからイーリームぎして北上し、東南に折れてスペリオル国有林に入った。82年型シェヴィスⅡ10の機嫌をとりながら走っていたのだから、当然ながら、猛スピードで飛ばすわけにはいかなかったが……。

その日は、なんだかジャック・カーマインみたいな一日だった。秋の中頃から終わりにかけてときどきそういう日があるものだ――明け方、空は黄味がかった灰色で、はたしてどんな一日になるのだらうと思っっているうちに、じわじわ気温が上昇し、結局十八度前後まで上がって、それ

がそのまま午後までもち、ふたたび夜寒が舞い戻って居坐るまでつづく——というような一日だった。ジャックのお氣にいらりのドライビング・ソング、彼のいわゆるヘロード・テーブルが、ダッシュボードの上の小さなテーブルデッキから流れていた。デッキはポーカーでせしめたのだが、自分のトラックのスロットにサイズが合わないとは知らなかった。それをむりやりダッシュボードの上に固定して、二個の小型スピーカーを座席の背後に置き、ブーツの革紐でいかげんに結わえつけて、ブレーキを踏んでも前に落ちないようにしてあった。そのスピーカーから音楽ががらがん流れていた。

あの日、あのころ、ジャック・カーマインとリンダ・ロボの人生は単なる順調というレベルを通り越して、大きく二歩ばかり先に進んでいた。リンダ……リンダ……当時の彼女のラスト・ネームは何だったっけ。知っている者もいたけれど、なかには知らない者もいた。ジャックの古くからの旅の相棒、ボビー・マクレガーはいつまでもその名前に——名前だけでなく彼女自身にも——こだわっていた。ボビーは頭のなかでよくあれこれ考えていた。アドキンス？ アーチャー？……そうだ、アーチャーだ。いや、ちがう、アなんとかだが、そのどっちでもない。

「どうでもいいじゃないか。むかしのことはだんだんどうでもよくなってくる。おれはもう忘れちゃったよ」何年か前に、最後にその話が出たとき、ジャックはボビーにそういった。

だが、ボビーはそれを信じなかった。ジャックは名前を知っているのに、ボビーにもだれにも教えようとしな、と彼は思っていた。ジャックは一度だけさりげなく彼女の名前を口にしたが、それっきり二度といわなかった。ボビーに訊かれると、彼は口をかたく結んでしまうのだった。

ジャックはいった。「いいかね、おれはあんたをよく知ってるが、あんたはたぶんこれを歌にして、一発当てようって魂胆なんだろう。それはいい。あんたがこれを歌にしようがすまいが、おれはちっともかまわない。好きなように書くがいいさ。ただ、彼女のラスト・ネームはどうしても思い出せないんだ」そういつてジャックは独特な笑みを浮かべた——ちよつとそっぽを向いた笑い方、ボビーがよく知っている、あの深刻な苦痛を内に秘めた笑い方だった。「そもそも過去のことを歌にするときには、おれなら歌詞よりメロディに重点をおくね。それに、たとえおれが名前を覚えていたとしても、男には秘密がなくちゃいけない。秘密がなけりゃ、神秘的な部分もないし、神秘的な部分がなければ、そいつの人生には記憶に残るようなものはなにもない。そういうものがなにもない人生なんて、生きていてもしょうがないじゃないか」

それはともかく、ジャックとリンダはスペリオル湖とおぼしき方角に向かっていた。天気は上々、車の窓はすっかりあけ放してあった。リンダがアイスボックスにのせていた両足をどけて、首の長い壺入りのビールを取り出すと、ふたりは昼前からビールの飲みだした。ジャックは壺を両脚のあいだに挟んでドアにもたれ、音楽に合わせてトラックの側面をたたいていた。片手でハンドルをにぎりながら、もう一方の手で調子っぱずれなリズムをとっている。やがてジミー・バフェットが「おれはパリで最後のマンゴー^{ラスト・マンゴー・イン・パリ}を食った……」とうたいだすと、ジャックは右手をハンドルから離して、デッキのポリウムを最大に上げ、トラックのドアをたたきながらクラクションを鳴らし、いっしょに大声でうたいだした。

リンダは笑いだして、その長い長い——とてつもなく長い——左脚を伸ばし、古いカウガー

ル・ブーツのかかとでハンドルを操ろうとした。しかし、それはうまくいかず、トラックはセンタラインを越えて、草地がちよっと凹んでいるだけの浅い側溝にはまりかけた。

ジャックもやはり笑いだして、ブレーキを踏むと、シェヴィはアスファルトから一メートルはみだしたところで停まった。彼はエンジンを切り、テープをがらがん鳴らしたまま、ステップに乗りだして、ジミー・バフェットに負けない大声で森に向かってがなりたてた。「いいか、よく聞け！ おれはいろんなところで最後のマンガーを食べたんだぞ……」

リンダはトラックの反対側からするりと降りて、ファンダンゴを踊りながら道路を横切り、トラックが尻を向けている道路の反対側の草地に入っていった。ジャックはトラックのフードによじ登り、ジミー・バフェットは相変わらず正午の太陽に届けとばかり絶叫していた。「……最初の中国行き快速船に乗った」リンダが腰を振りながら、上体をぐつと反らすと、濡れたアスファルトを思わせる漆黒の髪が地面すれすれに垂れさがった。彼女はすべての男をうっとりさせるタイプの美人ではなかったけれど、彼女にしかない独特な美しさをもっていた。それは男によからぬ考え——いや、見方によっては、いい考えなのかもしれないが——を起こさせるような美しさ、いいか悪いかはともかくとして、男をむずむずさせる美しさだった。

ボビー・マグレガーが彼女を間近から見たのは二度だけだった——そのほかにも一度、ちらっと見かけたことがあったけど。それでも、彼女と会うたびに、ボビーは考えたものだった。いっしょに旅をしても、疲れたとかなんだとかぶつぶついわない女がいるとすれば、それはこの女だろう。こんな即物的な形容は感心しないが、彼女は文字どおり尻の高い女で、長い脚のずっと上

のほうにきゅっと引き締まった尻があった。そして、あのすてきな胸——大きくて丸いにちがいない、と彼は想像していた——もボビーは忘れられなかった。近くから見ると、じっとこつちを見上げているような気がする胸。初めて彼女と会ったとき、ボビーは思わず目を引きつけられ、それを妻に気づかれて、あわてて視線をそらしたものだ。ボビーは彼女が忘れられなかった。彼はときどき——というより、しばしば——彼女のことを考えた。リンダ……ラスト・ネームが消えてしまったリンダ。そのためには、はるばる貨物列車を乗り継いで帰っていきたくなくなる体。想像力はしばしば現実と裏切られるけど、彼女の場合にかぎって、そんなことはないだろう、とボビー・マグレガーは思っていた。そう思っていたけれど、それを確かめるチャンスはなかった。彼女はジャック・カーマインの女だったからである。

ジミー・バフェット

マンゴーを食べたこと、最後の飛行機での脱出、苦境に陥ったとき助けてくれた第三世界の娘たちのことを大声でうたっている。

ジャック

トラックのフードの上で、首の長いビール壺を振りまわしながら、古い編み上げブーツでラテン・シャッフルの真似事をしている——それはじつに滑稽だった。彼はダンスは好きだったが、なんともいえず下手糞で、リズム感や優雅さの欠如をエネルギーで埋め合わせていた。

ジャック・カーマインは、自分が生きているこの時代の音楽や生活のリズムにどうしてもうまく乗れなかった——ほかの大多数の人たちはきちんとリズムをとらえているように見えるのに。いや、彼らもほんとうにそれをとらえているわけではないのかもしれない。ただ、教えられたとおりに動いているだけなのかもしれない。一度か二度、ジャックもこの順応主義者の群れに身を投じようかと思ったが、結局は考えなおして、そのまま珍種の男として生きてきた。ほかのだれも聞いたことのない、聞こえるとは思ってもみない音楽に合わせて踊りながら、そこから見ればヘンリー・デヴィッド・ソローがごくふつうの市民に見えるような生活をつづけてきた。ヘンリー・デヴィッド・ソローは二年ほどウォールデン湖を眺めて暮らしただけだが、ジャック・カーマインは生まれてからずっとそういう生活をしてきたのである。その間一度も水のなかから彼を見返す影を見たことはなかったけど。

ジャックのラングラーには、左の太股に小さなき裂きがある。先の尖ったパイプにジーンズを引っかけて、腿をちよつと切ったときにやぶけたのだ。シャツは赤と黒のフランネルで、袖を肘までまくり上げ、右の手首には革のバンドをしていたが、時計は付けていなかった。ジャック・カーマインは時計を信用しないのである。彼は腕時計をしたこともないし、目覚まし時計を持っていたこともない。目覚めるべき時間に自然に目を覚まし、一日中わき目もふらず働くのが彼のやり方だった。彼が仕事に遅れるのは、毎年四月一日、夏時間に切り替わるときだけだった。このときは時間がいきなり進められるので、いつも一日か二日調子が狂った。けれども、ジャックは二人分の仕事をこなし、遅刻した分は遅くまで働いて取り戻したから、ボスはなんにもいわ

なかった。

ジミー・バフェット

依然としてちっぽけなスピーカーを震わせている。いまにもそこから跳びだして、楽しげなふたりに合流したがつているような声だ。

ジャック

依然としてフードの上で、異国のダンスステップの目も当てられない真似ごとをつづけている。

リンダ

依然としてダンスをつづけながら、流れ者の暮らしの歌をうたっている。古いデニムのシャツを脱ぎ、目にもとまらぬ早業でブラジャーを外して、音楽に合わせて体を揺すりながら、その両方を頭上に掲げて振りまわす。ふたたび陽光の下に出られたのがうれしくてならないかのように。

ジャック

依然としてジミーの歌をがなりたてながら、リンダが彼のほうに向かつて胸をぶるぶる震わせるのを眺め、それから、彼女がくるりと後ろを向いて、クロクマやほかの森の住人たちにも見せてやろうといわんばかりに森のほうに体を向けると、あらためて彼女をじっと見る。なんときれいな背中をしているんだろう。彼女の背中はおやかなアーチを描いて

下に伸び、じつに悦ばしい丸みをもって突き出している尻につづいている。きれいな肌に背骨がくっきり浮き上がっている。

ジャックがボンネットから跳びおりると、リンダが彼に近づいてきた。トラックの運転席からは依然としてがんがん音楽が流れている。ふたりはハイウェイのどまんなかで踊りだした。ジャックはときどき彼女の胸に目をやった。自分のほうが少しでも背が高ければ、こういうとき、男はちろちろ下を見ずにはいられない。十月末の陽光はかなり衰えていたものの、まだ黄色くて暖かかった。ジャック・カーマインとリンダ・アなんとかはイーリーに向かう道路で踊っていた。こんなにしあわせな気分になったのはほんとうに久しぶりだった、とあとでリンダはいったものだった。

「サイゴンからの最後の飛行機に乗り……」それこそまさにジャックが七五年にやったことだった。ふたりは踊りながらトラックのほうに戻りかけたが、ジャックがふと彼女の肩越しに見ると、屋根の上に厳肅な法の象徴をのせた車がやってくる。ジャックは首の長いビール壺をきつと草むらに放りこみ、リンダは身をくねらせてシャツの袖に腕を通した。それから十八秒もしないうちに、州警のパトカーが彼らの横に停まった。ジャックの前に立っていたリンダは、後ろ手に持っているブラジャーをボロ人形のアンミたいに揺すっていた。ジャックは彼女の手からそれを取って、ジーンズの前に押しこんだ。

警官の目に映ったのは、かなり白髪が多い褐色の長髪をフランネルのシャツの襟の上に二イン